

『どこまで頑ななのか！』

'21/08/01

聖書箇所: マルコの福音書 12 章 13-27 節 (新約 p.91-)

前回、私たちが学んだように、今から約 2000 年前…、あのイエス様の時代の祭司長たちは、神に仕える身でありながら、あろうことか、その神様から遣わされたイエス・キリストに嫉妬をして…、そのイエス様のことを何とかして殺してしまおうと企んでおりました。…でも、そんな状況の中で、イエス様は、こんな例え話を話してくださいました。

つい先週の礼拝で引用したばかりなので、皆さんも、よく覚えてくださっているはずですが、ぶどう園のご主人が、何人もものしもべたちを遣わしたという話。最後、あのぶどう園のご主人様は、自分のひとり息子まで遣わしますが、そのぶどう園の農夫たちは、そのひとり息子さえ、袋叩きにして、殺してしまいます。だから、そのぶどう園のご主人は、最後、その農夫たちのことを打ち滅ぼして、そのぶどう園を他の者たちに与えてしまうという結末でした。

それと、もう一つ…、並行記事であるマタイ 21 章に記されてある例え話から…、それもまた、ぶどう園に関する例え話でした。そのご主人様は、2 人の息子たちに、「ぶどう園に来て、手伝ってくれ！」と願います。しかし、兄息子の方は「行きます！」と言って、行きませんでした。兄息子の方は「口だけ」だったのです。その逆に、弟息子の方は「行きたくありません…」と言いましたが、後から、『悪かったと思って出かけて行った』のです。皆さん、覚えてくださっていますか？…イエス様は、この例えを通して、「取税人や遊女たちの方が神の国に入っている！（＝救われている！）」とおっしゃられたのです！…それは、彼らが、自分たちの罪を自覚しただけじゃない！その罪を悔い改めたからであり…、また、あのバプテスマのヨハネを通して、救い主であるイエス様を信じたからです！

命題: 当時の者たちは、どのように、心が頑なであったでしょう？

そのように、イエス様は…、また、天の父なる神様は、どんな罪人であろうと、彼らが自分の罪を悔い改め、また、救い主であるイエス様のことを信じるなら救われます。しかし、問題は、実に、多くの人たちが、自分の罪を悔い改めて、イエス様のことを信じようとしなかったことです。彼らの 1 番の問題は、その心が頑なであったことでした。

実は、今日のみことばも、その当時のイスラエルの民たちが…、「彼らの心」が頑なであった！ということをお話してきています。彼らの心は、一体どこまで、頑なであったのでしょうか？どうか、皆さんには、今日これから学んでいくみことばによって、その頑なな心が砕かれて、まずは、1 番大事な救いを受け取ってくださって…、その後、ますます、このみことばに従っていくことによって、神様に喜ばれる人生を送ってくださって…、ますます、神様の偉大さが明らかにされていくことを願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ伝 12:13 以降をお聞きください。

I・納税に関する質問で、イエスを攻撃しようとした！（13-17 節）

まずは、今日のみことばの前半部分に当たる、13-17 節の部分を通して、当時の祭司長たちが、納税に関する質問をして、イエス様のことを「攻撃」しようとした！ということを確認していきたいと思えます。そこには、このように記されてあります。

13 さて、彼らは、イエスに何か言わせて、わなに陥れようとして、パリサイ人とヘロデ党の者数人をイエスのところへ送った。

14 彼らはイエスのところに来て、言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。と

ころで、カイザルに税金を納めることは律法にかなっていることでしょうか、かなっていないことでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないのでしょうか。」

15 イエスは彼らの擬装を見抜いて言われた。「なぜ、わたしをためすのか。デナリ銀貨を持って来て見せなさい。」

16 彼らは持って来た。そこでイエスは彼らに言われた。「これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」彼らは、「カイザルのです」と言った。

17 するとイエスは言われた。「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」彼らはイエスに驚嘆した。

●祭司長たちが遣わした間者(＝スパイ)たち

さて、今読んだ 13 節をご覧くださいますと、『さて、彼らは…』とあります。ここで言われている『彼ら』という言葉が、具体的に誰のことを指しているのか？…そのことを知るためには、マルコ 11:27 まで遡らないと分かりません。マルコ 11:27 まで遡って、ようやく、ここで言われている『彼ら』という言葉が、実は、『祭司長、律法学者、長老たち』であることが分かります。つまり、この話は、マルコ 11:27 から続いている、1 つの文脈なのです。そのため、今日のメッセージの命題は、先週のものと同じようなものになっています。

さて、ここでも、その祭司長たちのイエス様に対する攻撃は続いています。この時、祭司長たちは、イエス様のことを罵に引つけようとして、13 節にある通り、『パリサイ人とヘロデ党の者数人をイエスのところへ送った』とあります。彼らパリサイ人とヘロデ党の者たちのことを、この平行記事である、ルカ伝には、『義人を装った間者』(ルカ 20:20)と記されてあります。「間者」と言いますのは、所謂、「スパイのこと」です。つまり、この時、祭司長たちは自分たちで行こうとはせず…、一見、「善人のように見せかけたスパイのような存在」をイエス様のところへ送ったのです。…このように、祭司長たちの企みは、ますます、巧妙かつ、ずる賢いものになっていきます。

そういうことが分かりますと、今日のみことばの 14 節に記されてある内容が、彼らスパイの本心ではないことが分かります。その 14 節をご覧くださいますと、そのスパイたちが、イエス様に質問をする前に、こう言います、『先生。私たちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。』って…。皆さん、分かってくださいますか？ここで、スパイたちは善人…、つまり、まるで、求道者のような振りをして、「先生！あなたは、真実なお方で、誰もばばからない(＝「人目を気にしない」の意)で、正しいことだけを…、また、救いの道を教えてくださっていますよね？」という趣旨の発言をしたのです。つまり、イエス様のお話を…、イエス様のご機嫌を取って、何とかして、「イエス様の失言」を引き出そうとする魂胆なのです。…ヒドイでしょ？

さて、ここで少し話が変わりますが、皆さんは、今、コロナ禍で行なわれているオリンピックについて、どう思われますか？…賛成ですか？反対ですか？…あるいは、今のコロナ禍で、何度も出されている「緊急事態宣言」や「飲食店に対する規制？」について、賛成でしょうか？反対でしょうか？…正直、私にも私なりの意見はありますが、皆さんだって、同じでしょう？…でも、こういった問題の難しいのは、こっちを立てれば、あっちが苦しむ。あっちを優先すれば、こっちにしわ寄せが生じる、ということではないでしょうか？…つまり、皆が喜ぶような簡単な解決策がほとんど無いような、難しい問題なのです。

実は、この当時の税金に関する問題も、それと似たような難問でした。彼らは、それを持ち出してきたのです。どうぞ、14 節の後半に注目してみてください。そこで、そのスパイたちは、イエス様に対して、『ところで、カイザルに税金を納めることは律法にかなっていることでしょうか、かなっていないことでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないのでしょうか。』という「難題」を吹っ掛けます。

●スパイたちの 策略

のように、彼らスパイたちは、当時の税金に関する質問をしました。…皆さんもご存知の通り、この当時、イスラエルの地方は、あの強大なローマ帝国に支配されておりました。ここで言われている、『カイザル』というのは、その当時のローマ皇帝…、つまり、ローマ帝国における、トップのことを指しています。

実は、この『カイザル』と言いますのは、歴史的には、「ガイウス・ユリウス・カエサル」と言ひまして、彼は、紀元前1世紀において、当時、共和制であったローマを治めていた政治家の1人でありました。この「カイザル」という言葉の英語読みから、彼は「シーザー」とも呼ばれています。特に、彼が亡くなる時に発したとされる、「ブルータス、お前もか！」という言葉はあまりにも有名です。実は、この「カイザル」という人名があまりにも有名で、その後、この言葉が、ローマの皇帝を指す言葉になっていくわけです。

さて、この当時、イスラエルは、あのローマ帝国の…、言わば、属州でありました。それ故に、イスラエルは、そのローマに対して税金を納めていたのです。その税金を取り立てる働きをしていたのが、所謂、『取税人』でありました。皆さんも、この当時、取税人たちが、自分たちの同胞であるユダヤ人から税金を取り立てて…、それを憎つきローマに納めていたために、どれほど、イスラエルの民たちから嫌われていたか、ご存知だと思います。

この時、イスラエルが払わなければいけなかった税金は、主なものでも…、例えば、何かの収入があった時に納める所得税、あるいは、土地を持っている者たちが納めなければならない地稅…、そして、また、人頭税(じんとうぜい)と言って、税金の支払い能力に関係なく、すべての民たちが支払わなければならない種類の税金などもあったそうです。例えば、ルカ2章に、イエス様が誕生された頃、『全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た…』(ルカ2:1)ということが記されてありますが、あれも、実は、ローマがそういった住民登録をすることで、自分たちの領地に住んでいる住民たちから、もれなく税金を徴収することが目的であったそうです。

でも、そういったことは、支配する側に立っていれば当たり前のことでも…、支配されている側からすると、決して、嬉しいことではありません。まして、イスラエルと言いますのは、神様から選ばれた、特別な民族であったわけで…、そんな選民であった自分たちが、神を知らない異邦人たちに税金を納めるというのは、屈辱以外の何物でも無かっただろうと思われまふ。…ですから、この当時は、イスラエルの中でも、ローマに税金を納めることを、良しとしない者たちが数多くおりました。

実は、この時、祭司長たちが遣わした、パリサイ人とヘロデ党の者たちですが…、まず、このパリサイ人たちと言いますのは、「律法や先祖からの言い伝えを厳格に守ることを教え、自分たちこそ神の民であり、神以外の何者にも支配されるべきではない！」と考えていました。ま、そういった考えから、彼らパリサイ人たちは、ローマに税金を納めることを嘆かわしいことであると考えていたのです。そうして、もう一方のヘロデ党とは言いますと、「彼らは、ヘロデ王朝(ユダヤ人による政治)の復権を強く願っていた者たち」で、彼らもまた、ローマに税金を納めることを快く思っていなかったのです。祭司長たちは、そういったわけで、この時には、自分たちが行くことをせず、彼らのことを遣わしたのです。…非常に、ずる賢いでしょ？

さて、今日のみことばに戻りますが…、もしも、この時、イエス様が、「税金をカイザルに納めることは、律法の教えにかなっていない！」と言ったら、恐らくは、民衆たちのイエス様に対する人気は落ちる、とスパイたちは考えたのでしょう。また、もしもイエス様が、「税金などは納めなくても良い！」と言ったら、それこそ、祭司長たちの思うつぼで…、彼らは、そのことをローマ兵にバラして、イエス様をローマに訴える口実を見つけることができます。…ですから、この時、イエス様は、単純に、イエスとも…、あるいは、ノーとも言えないような難しい状況に置かれていたわけなのです。

●そういった難問に対する、イエス様の 回答

でも、そういった難問に対するイエス様のお答えは、イエスでも、ノーでもありませんでした。どうぞ、今日のみことばの15節をご覧ください。イエス様は、そこで、『デナリ銀貨を持って来て見せなさい！』とおっしゃいます。…と言うのも、このデナリ銀貨とは、ローマが作り…、ローマが発行していた通貨であったからです。すると、その銀貨には、カイザルの肖像が刻まれ…、カイザルの名前が刻まれておりました…。それはそうですよ？だって、その銀貨は、ローマが作ったものなのですから…。

そこで、イエス様は、こうおっしゃられます、『カイザルのものはカイザルに返しなさい！』って…。皆さん、分かってくださいます？イエス様は、その銀貨は、もともとローマが作ったものなのだから、ローマに返して当然だ！とおっしゃられたのです。ここでイエス様は、国家に対する責任を教えておられます。…実は、ここで、「返す」(ἀποδίδωμι)と訳されてある言葉は、「回復する、元に戻す、(借りていたものや当然渡すべきものを)返す、義務を果たす、決算報告をする、…」というような意味の言葉で…、私たちが当然なすべき責任について、教え諭す時に使われる言葉であることが分かります。…と言いますのも、実は、この当時、ローマは、治安の維持はもちろんのこと、道路や水道の整備など、民衆たちの様々な必要を満たしてくれている、という側面もあったからです。

こういったことは、イエス様だけの教えではありません。例えば、あのパウロも、ローマ13:1で、こう教えてくれています。『人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。』⇒このみことばは、私たちが、基本的には、私たちの上に立てられた権威に従うべきである！ということが教えられてあります。…と言うのも、それが例え、どのような権威であったとしても、神様の御許し無しに…、神のみこころでなく、存在している権威など無いからです。すべての権威は皆、神様のみこころの内に立てられている！と言うのです。ですから、本当に救われたクリスチャンたちは皆、それがどこの国であろうと…、神様のみこころに反するような教えで無い限りは、忠実で、法を守る、善良な国民であるはずなのです(1ペテロ2:17)。

そうように…、確かに、聖書のみことばは、私たちクリスチャンが、この世の法を守るべきことを教えてくれています。…と同時に、今日のみことばは、私たち一人ひとりが、実は、神様に対しても、守るべき責任があるということ…、具体的には、献金についても教えてくださっています。それが、17節の後半、『…そして神のものは神に返しなさい！』(マルコ12:17)という部分です。

果たして、私や皆さんに、神様から与えられて“いない”ものがあるでしょうか？例えば、皆さんに今、与えられてあるからだや健康、また、家族や友人…、生まれながらに持っている才能や財産など…、どれもこれも、すべて、神様が皆さんに与えてくださったものじゃないですか！そうですよね！…もしも、天の神様が、天からの恵みを止められたら、それだけで、私たち人間は生きていくことができません。だから、私たちクリスチャンは、精一杯の感謝と献身を思いをもって、与えられたものの一部を、喜んで神様にお返しするのです。

でも、そういった献金で何が分かるのか？…実は、私たちが喜んで、神様に献げられるかどうかで、私たちが、本当に神様に感謝しているかどうか？あるいは、この神様に信頼しているかどうか？そうして、私たちが、本当に、この神様のことを御主人としているか？それとも、お金や自分自身のことを一番に生きているかどうか？ということが分かるのです。…だから、イエス様は、山上の説教でも、こんな風に教えてくださったでしょ？『19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。21 あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。』(マタ

イ 6:19-21)って…。果たして、皆さんの心は…、関心は、この地上のことでしょうか？それとも、天にあるのでしょうか？どちらでしょう？

II・復活を信じようとしなかった！（18-27 節）

今度、2番目のポイントは、少し駆け足で見たいと思います。イスラエルの民たちの頑なさ…、それは、彼らが、「復活」という大切な教えを十分に信じようとしなかった！ということにも現われています。どうぞ、今日のみことばの後半部分、18-27 節をご覧ください。そこには、こう記されています。

- 18 また、復活はないと主張していたサドカイ人たちが、イエスのところに来て、質問した。
19 「先生。モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、兄が死んで妻をあとに残し、しかも子がいない場合には、その弟はその女を妻にして、兄のための子をもうけなければならない。』
20 さて、七人の兄弟がいました。長男が妻をめとりましたが、子を残さずに死にました。
21 そこで次男がその女を妻にしたところ、やはり子を残さずに死にました。三男も同様でした。
22 こうして、七人とも子を残しませんでした。最後に、女も死にました。
23 復活の際、彼らがよみがえるとき、その女はだれの妻なのでしょう。七人ともその女を妻にしたのですが。」
24 イエスは彼らに言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。
25 人が死人の中からよみがえるときには、めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。
26 それに、死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の個所で、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。
27 神は死んだ者の神ではありません。生きてる者の神です。あなたがたはたいへんな思い違いをしています。」

●復活を否定していた サドカイ 人たち

イエス様のところへ、またもや、ある質問をしにやって来た者たちがおりました。それは、『サドカイ人たち』でありました。ここに書かれていますように、彼らは、復活を信じておりませんでした。彼らの理解では、「人間は皆、この地上でのいのちが尽きると、それですべてが終わりである…」と考えておりました。実は、このサドカイ人たちと言いますのは、ユダヤ人たちの中では、所謂、その多くが貴族階級に属しており…、多くの大祭司は、彼らサドカイ人たちから選ばれていたそうです。

また、彼らは、聖書の中でも（当時は、旧約聖書のみ）、所謂、モーセ五書しか、神様からのメッセージとして受け止めておりませんでした。そのため、彼らは、人間が死んだ後、どうなるのか？ということに関して、あまり理解していなかったのです。彼らの思いは、それこそ、地上のことだけだったのです。

それと、実は、申命記 25 章などを見ても、「一緒に住んでいる兄弟が亡くなって、その夫婦に子どもが居ない場合、その亡くなった兄弟の奥さんは、生き残った兄弟と結婚して、後継ぎを儲けないといけない！」というような教えがあります。…そこから、サドカイ人たちが言うのは、「じゃあ、子どもができなかったために、7人も夫が居た女性は、一体、誰の奥さんになるのですか？」というようなものでした。

どうか、皆さん、分かってくださいね。…実は、彼らもまた、こういったことを真剣にイエス様に尋ねたものではありません。…だって、彼らサドカイ人たちは、復活の教えを信じていなかったわけですから。…だって、彼らがしたかったことは、「じゃあ、もしも、夫が7人もいた奥さんが復活したら、その奥さんは誰の

奥さんなのか？」と言って、イエス様のこと…、復活の教えをバカにしているのです。

じゃあ、彼らの問題は、どういったところにあったのでしょうか？…それは、彼らが、神様からの啓示…、つまり、メッセージをモーセ五書に限定してしまったところにあります。…きっと、皆さんも、モーセ五書がある程度、読んでくださったものとして、説明させていただきます。果たして、モーセ五書は、それだけで“完結”していますか？…いいえ！もしも、モーセ五書を真剣に読んでくださったら、絶対に、モーセ五書だけで完結している！とは言えないはず。だから、彼らサドカイ人たちには、神様の真理の…、ほんの一部しか理解できていなかったのです。それが、彼らの大きな問題でありました。

実は、それと同じことが、当時のユダヤ人たち…、また、現代のユダヤ人たちにも言えます。…だって、旧約聖書も、私たちが持っている、あの 39 巻だけで、完結していませんか？…もしも、旧約聖書が、あの 39 巻で完結していると言うのなら、神様が約束してくださった「神の国」に関する預言は、どうなるのでしょうか？また、約束の救い主に関してはどうでしょう？…そうでしょ！

つまり、サドカイ人たちも、また、ユダヤ人たちも…、彼らの問題は、神様からの啓示を中途半端なままで満足してしまったことです！…つまり、彼らの心が頑なであったのです。…実は、それと同じようなことが、私たちにも起こり得ます。例えば、私たちもまた、「神様の教えを十分に理解できている！」と思ってしまったら、もう、それ以上、ほとんど新しい理解には到達できないでしょ？…だから、そういった人々には、ほとんど霊的な成長が見込めないのです。…と言うのも、彼らが聞く耳を持たず、神様の前に、真剣に成長したい！と思っていないから。…ひょっとしたら、今日、このメッセージを聞いてくださっている皆さんの中にも、そういったような方がおられないでしょうか？

●イエス様からの 指摘 と 警告 ！

どうぞ、今日のみことばの 24 節をご覧ください。イエス様は、サドカイ人たちの質問に対して、どう返答しておられますか？…『そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。』良いですか？皆さん。イエス様がおっしゃるのは、まず、サドカイ人たちの質問に対して、それは、「あなたの方の“思い違い”だ！」とおっしゃっておられるのです。しかも、その理由は、「神様からの啓示を十分に知らないから」じゃない！…何とあります？…『聖書も神の力も知らないから』である！とイエス様は、おっしゃるのです。

実は、私たちが行っている「聖書的カウンセリング」のアプローチも、こういったみことばと非常に似ています。…皆さん、知っていますか？この世の（心理学に基づいた？）カウンセリングは、基本的に、その多くは、「あなたは悪くないよ！」ということを教えてくれるのです。そうやって、その人が抱えている悩みや劣等感から解放してあげようというようなアプローチなのです。実は、「キリスト教カウンセリング」もまた、それと近いアプローチをしていることが多いという風に私は聞いています。この世のカウンセリングと、キリスト教カウンセリングの違いは、そのアプローチに、聖書のみことばを使うかどうかで、その方向性はほとんど同じなのです。

しかし、本当の聖書的カウンセリングのアプローチは、かなり違います。確かに、この世の中にも、相手側にも、多少の問題はあるでしょう。…と言いますのも、神様を除いて、完璧な存在は、どこにも居ないからです。でも、1番の問題は、この世の中でも、相手側でも…、もちろん、神様でもありません。1番の問題は、私たち自身であり…、私たちの内に潜んでいる罪なのです！…と言うのも、罪は、相手が例え、完璧な神様であっても、その相手に対して、不満を持ったり、怒りを持ったりするからです。例えば、あのエデンの園のアダムやエバ…、あるいは、罪を犯し始めたサタンがそうであったでしょ？

じゃあ、どうしたら良いのか？…私たちがもっと、神様の偉大さを知り…、その神様が如何に、すべてのことを、最善なるみこころのままに治めておられるか？それと、聖書のみことばを通して、私たちの問題や罪について知ることができれば、もっと、今の環境の中にあっても…、つまり、その問題が無くならなくても感謝できたり、希望を見出せたりするのです。…違います？

ここで、イエス様は、私たち人間の死後と言うか、厳密には、『死人の中からよみがえるときには…』とおっしゃっておられることに注目してください。私たちが死んだ後に何かがあるか？しばらく後、私たち人間は皆、神様の裁きを受けることになります。…と言っても、イエス様のことを信じて救われた者たちと、そうではない者たちとは、大きな違いがあります。まず、イエス様を信じて救われた者たちの受ける裁きは、「キリストの裁きの座」と言って、イエス様を信じて救われてからの行ないに応じて裁かれます(Ⅱコリント 5:10)。それとは反対に、イエス様のことを信じず、救われなかった者たちの裁きは、「大きな白い御座の裁き」と言って、彼らは皆、最後、永遠の火と硫黄の燃える池の中に投げ込まれます(黙示録 20 章)。いずれにしても、私たち人間が死後、結婚することはありませんし…、死後に、子どもたちを儲けることもありません。だから、そういった意味では、『天の御使いたちのよう』なのです。

こういことから、恐らく、私たちが死んだ後、夫婦の関係は解消されます。…だから、死後にあって、何度も再婚している人が、天にあって、その1人の人を何人かで取り合う、なんてことは起こり得ないのです。…もちろん、私たちの記憶が失われてしまうわけではないので、「ああ、この人とはかつて夫婦だった…。この人とは、こんな良い思い出がある…」というような記憶はあると思われま。しかし、死後…と言うか復活後は、結婚関係は解消されます。だから、結婚式の誓いでこう言いますでしょ？…「死が2人を分かちまで…」って…。と言うことはつまり、結婚関係は、私たちが“生かされている間だけ”有効なのです。だから、聖書のみことばは、配偶者が死んでしまった後の再婚は認めているわけです。

どうぞ、皆さん。最後に、今日のみことばの 26-27 節に注目してみてください。ここで、イエス様は、あのモーセが燃える柴の中で、神様から召命を受けた時の話をしてくださっています。どうぞ、ここでイエス様が解き明かしてくださっている、**出エジプト記 3:6** を紹介させていただきます。そこには、『また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。』と書かれています。

皆さん、ここで、イエス様が何を教えようとしておられるか分かってくださいます？…今日のみことばで、イエス様は、「このみことばが現在形で表現されてある」ことについて説明してくださっているのです。…どういことなのか？もう少し詳しく説明させていただきますと、神様が、モーセに声をかけられた、この時は、おおよそ紀元前 1445 年と考えられています。そして、あのアブラハムが亡くなったのは紀元前 1990 年、イサクは紀元前 1885 年、そして、ヤコブは紀元前 1858 年とされています(福音派の見解?)。

ですから、モーセが召命を受けた時からすると、彼らは、もう 400-500 年も前に亡くなっている計算になります。しかし、そんな彼らのことを、天の神様は、「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神で“あった”」ではなくて、『わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神で“ある”』という風に、現在形で紹介されたのです。これは、つまり、神様とアブラハム、また、神様とイサク、神様とヤコブとの関係というのは、彼らの死後数百年経った後も続いていたし…、今もまだ、続いている！と言うのです。

<励ましの言葉>

少し前の礼拝でも学んだように、1度、イエス様を信じて救われた者たちと、神様との関係は永遠です！誰であっても、その関係を引き離すことはできません！特に、ヨハネ 10 章のみことばが教えてくれているように…。だから、私たちは今の内に、この神様との関係というものを、しっかりと確立しておかないと

いけないのです！…もう少し、具体的に言いますと、もしも、私たちが、この神様としっかり継ぎ合わされることなく、この世での生涯を終えていくな、その人に待っているのは、裁きだけです！

死後に、救われた者たちが神様から引き離される可能性が全く無いのと同じように、死後、救われていなかった者たちに救いのチャンスはありません！神様と皆さんとの関係性と言うべきものは、一生ではなく…、永遠に続いていくのです！果たして、あなたと神様とは、決して、離れないような強い結び付きで繋がっているでしょうか？…もしも、そうなら、あなたは I ヨハネ書が教えてくれているように、罪の中に留まることができず(Ⅰヨハネ 3:9, 5:18)、神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっておられるはずです(Ⅰヨハネ 3:22)。

今日、私が皆さんにお勧めしたいのは、例えあなたがクリスチャンであろうと、クリスチャンでなかりょうと、神様の前に、頑なな思いを捨て去ってくださることです。そうして、1日も早く、神様の前に、心を開いてくださって、まずは、自分の罪や過ちを神様の前に認め…、それを悔い改めてくださることです。もし、皆さんが自分の罪を告白して、悔い改めるなら、神様はその罪を赦し、すべての悪から、あなたのことを守ってくださいます(Ⅰヨハネ 1:8-10)。

問題は、私たちが、なかなか、自分たちの罪や過ちを認めようとはせずに、自分以外の者たちに、何らかの問題を見つけてしまうことです。もちろん、彼らにも罪や過ちはあります！しかし、私が言いたいのは、1番の問題は、あなた自身なのです！そうして、あなたが自分の罪や至らない部分に気が付き、そこを変えることができれば、それだけで、あなたの人生や平安は、大きく変えられるはずなのです！…どうか、1日も早くに、このイエス様を信じて、神様の平安を手にしていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。